

氏 名 前田 明美

学位の種類 博士（地域研究）

学位記番号 国博甲第5号

学位授与の日付 平成31年3月21日

論文題目 バローハのエッセイにおけるフィクション性の意味

審査委員 主査（教授）上 村 直 樹

（教授）柳 原 孝 敦（東京大学）

（教授）牛 田 千 鶴

（教授）濱 田 琢 司

1. 論文の内容の要旨

本論文は、1898年の米西戦争敗戦により植民地を失ったスペインの現状を憂い、社会改革を訴える若い作家たち（いわゆる「1898年の世代」／以下、「98年の世代」）が発言力を強めていた時期に執筆活動を開始したピオ・バローハ（1872～1956年）に焦点をあて、本領である小説作品を発表していく陰でエッセイを常に手がけていたことに着目し、表面的な表現を超えた隠されたメッセージをエッセイの中に読み取り、その特徴と作者の意図を明らかにしようとするものである。先行研究を丁寧に繙読した上で筆者、前田明美氏は、バローハのエッセイと小説の間には一種の混交が認められるとの既存研究の見解から更に踏み込んで、バローハのエッセイにおける虚構がどのような意味をもつのか、彼が敢えてフィクション性を採用した意図は何かについて、考察と解明を試みる。バローハ研究に新たな蓄積をもたらす意欲的な挑戦ともいえる本論文の構成と論旨は、概ね以下の通りである。

第一部（第1～2章）では、バローハと同世代の他の作家たちが生きた時代背景と、彼らのエッセイ作品の特徴を明らかにすることを通じ、社会と文壇のなかでのバローハの位置づけが確認される。

第1章第1節「社会背景」では、バローハの歴史認識や文学観にも影響を及ぼしたと思われる時代背景に関し、19世紀およびそれ以前の政治的混乱期にまで遡り、バローハの晩年に起きた内戦に至るまでのスペインの社会状況が俯瞰される。続いて第2節「民衆の姿」では、公の歴史には現れない民衆に視線が注がれる。民衆たちは、バローハの小説においては主人公の座を占める一方で、エッセイでは名もない庶民の一人一人として温かみをもって語られる。前田氏は、「98年の世代」の作家たちが、連綿と続くスペイン人の本質と精神をそうした民衆の姿に見出そうとした、と指摘する。

第2章では、第1節で「98年の世代」の定義が再確認された後に、第2節において各作家のエッセイの特徴が分析される。米西戦争の敗北により植民地を失い、いわば公的な歴史の表舞台から去る祖国スペインの再生を望んだ彼らは、やがて記録には残らない個人の生—これをウナムーノは〈内的歴史〉と命名—に注目していく。「98年の世代」の先駆者といえるガニベーやコスタが、それぞれの立場から社会改革やスペインの精神性の擁護を訴えたのに対して、ウナムーノは自身の思想の矛盾を露呈することを厭わず、マエストゥも改革から保守へと主張を転換させた。一方でアソリンはエッセイと非常に近い自伝的小説も発表することで、両者に共通する「98年の世代」としての風景描写の意味を打ち立てた。またマチャードは、その詩作品とは異なる寓話的な散文作品を残した。これらの作家たちやバローハを比較すると、先駆者たちに比べてエッセイというジャンルを柔軟に扱っており、必ずしも一貫した思想を表明することにこだわっていない点で共通しているといえる。しかしエッセイにフィクション性を採用することで、その行間に意味を含ませる、つまりパフォーマティヴ（行為遂行的なもの）を利用する、という試みはバローハのみに認められると前田氏は主張する。

第二部（第3～5章）では、バローハのエッセイ8作品が分析対象とされ、パフォーマテ

イヴがどのように認められ、それが何を意図しているのかについて考察が深められる。

第3章では、新聞記事等を再編した初期のエッセイ集『道化の舞台』と『新・道化の舞台』がとり上げられる。出版当時の社会情勢に鑑みた発言が認められる一方で、それとは無関係な民衆の姿にも紙幅を割き、そこにフィクション性が多く用いられていることから、スペイン社会の再生を望むとともに、敗戦といった公的な歴史とは無関係な人々に祖国の姿を求めた「98年の世代」の特徴が強く認められる、と前田氏は説く。

第4章では、1917年から19年の間に発表された書下ろしエッセイ三作品（『青春、自画自賛』『孤独の時間』『ユーモアの洞窟』）の分析がなされる。ストーリー性とフィクション性を有する各エッセイの全体をもってバローハが暗に主張するのは、一貫して小説の自由であるとする前田氏は、その動機として、この時期に彼が執筆に取り組んでいた歴史小説シリーズの存在に触れ、同シリーズに記された政治的エピソードの内容が現実の歴史と混同されることへの懸念や、小説の社会的役割を主張する若き論客オルテガ・イ・ガセーの姿勢に対抗する意図もあったと論及する。

第5章では1930年以降のエッセイ集が扱われる。フィクション性の高い記述がこの時代には漸減し、内戦後のエッセイではほぼ息をひそめることになる。『間奏曲』はプリモ・デ・リベラ独裁の末期、共和制を望む声が高まる一と同時に社会が混乱を強める一時期に、『カラフルなショーウインドー』は第二共和制が行き詰まりを呈する時期にそれぞれ出版された。そして『ささやかな随筆集』はスペイン内戦中、亡命先からブエノスアイレスの新聞に寄稿していた記事を中心にまとめたものである。前田氏は、フィクション性の減少が文学、ひいては社会の自由度を映す一種のバロメーターであったと分析する。スペインに帰国後、小説の執筆はわずかしか見られなくなった最晩年のバローハが残した大著は、回想録であった。フィクション性の排除により文学の自由の欠如を暗に訴えることで、なお権力に対抗できる文学の可能性を示したのだと、前田氏は考察を加えている。

終章では、バローハのエッセイが、彼の一連の作品のなかで、小説のみでは表現しきれなかった役割を担っていたとした上で、そこに「パフォーマティヴ」が活かされていることから、諸エッセイは文学作品としての価値を保ちつつ、社会と文学の関わりという大きなテーマを提示することができたのだと結論づけられる。バローハが「98年の世代」という呼称自体に疑問を呈しており、自身の作品にそのようなレッテルが貼られるのは不本意であったろうとしながらも、前田氏は各々のエッセイが、発表された時代の自由度を反映しており、また諸エッセイを通して読むことでスペインという国の変遷を辿ることができるように著されている、と分析する。バローハのエッセイは、フィクションを交えた構成を特徴としつつ、彼の思想を不可解なものにはしていない。前田氏は、そもそも「98年の世代」の主張が観念的に過ぎ、社会を変えるような強い影響力を持つには至らなかったことを考慮すれば、バローハのエッセイへの取り組み方は、実は正に「98年の世代」らしいものであった、と確言する。そして、バローハの諸エッセイは小説の陰に隠れることなく、小説を支える役割も果たしながら、作者の業績の重要な位置を占めるものとの評価を明示し、論放は結ばれる。

2. 論文審査の結果の要旨

2019年2月3日午後2時より最終試験（口頭試問）が公開で行われ、前田明美氏から論文全体の概要について説明がなされた後、審査委員各位ならびに他の出席者から質問やコメントが寄せられた。

本論文は、スペイン史の重要な転換点の一つである1898年の「米西戦争」の影響の下に自らの文学を確立していった「98年の世代」と呼ばれる一連の作家の一人、ピオ・バローハのエッセイ作品のフィクション性に注目して、バローハ文学の新たな評価と位置づけを試みた意欲的な論文であり、的確な資料の分析と概ね妥当な論理構成によって、博士論文に相応しい質と内容を備えた論文となっている。また、バローハが生きた時代のスペイン史の展開やその文学的意味、そして「98年の世代」が注目した「民衆」を中心とする国民の意識（アイデンティティ）と関連づけながら、それぞれの年代のエッセイを読み解く手腕には確かなものがあり、博士論文としての水準を十分示していると言える。そうした総合的評価に揺るぎはないが、敢えて注文をつけるとすれば、との前置きのもと、以下のような批評が加えられた。

具体的にはまず、ピオ・バローハの8つのエッセイ集を対象とした本論文では、個々のエッセイの記述をとり上げ丹念な分析に取り組んでいると評価できる一方で、分析対象が個別のエッセイなのか、単行本としてまとめられたエッセイ集なのかが、やや不明確にもみえる、との言及があった。著者が目指すのは後者であろうから、エッセイ集としてのまとまりが持つ意味についても十分に検討し、そうした分析の意図・意義を、より明確に記述することが望ましかったのではないかと、とも付言された。また、本論文の基本的な概念の一つである「民衆」に関して、その定義が必ずしも明瞭ではなく、叙述の中で意味内容にぶれの見られる点や、時代背景に触れた部分で少数の歴史解釈に過度に依存する傾向が見られる点が惜しまれる、との指摘もあった。

さらに他の審査委員は、バローハのエッセイが小説と区別が付きがたいものであることを出発点に、そのことの意義を探る本論文は、バローハが属していたとされる「98年の世代」の定義を「文壇の伝統に則り社会問題も視野に入れながら、文学の新しい様式とテーマの提示方法を模索した作家たちだった」とすることによって、ジャンル論のみならず文学史の読み替えにも切り込んでいるとし、この新しい試みを、広くバローハのエッセイを参照し論じることによって完遂している、と評価した。しかしその一方で、同時代の文学の大きな流れと、その中でのバローハの位置づけに関する考察はもっと厚くてもよかったのでは、との疑問が呈され、18世紀以降のスペイン社会の動向に目配りを怠らず、「98年の世代」の代表的作家たちのエッセイにも配慮してはいるが、そうした作家たちの功績に触れるくだけで十全な考察を欠くままに断言的表現が選択されている点はいささか不用意であった、との指摘もなされた。また、小説とエッセイのみに限定されない他の文学ジャンルへの言及や、文献学的テキスト・クリティークの作業の成果も少しばかり入れて欲しかった、との注文も加えられた。ただし、日本にいながらにしてこうした地道な作業に取り組むことが困難であるのは承知しているとして理解が示され、今後の研究の進捗に期待

したいとの前向きな発言で結ばれた。

結論として本論文は、今後のピオ・バローハ研究に以下の点から極めて有意義であると評価できる。すなわち前田氏が過去のバローハに関する先行研究を精査した上で、小説家としては世界的に有名な作家だけに数々の研究書・論文が刊行されているにもかかわらず、彼のエッセイ群に関する文献の数が非常に少ないことに着目し、これまでにない新たな切り口でテーマを設定し論述した点である。これにより、本論文は、先行研究が小説家としてのバローハにのみ注目する傾向にあったのに対して、エッセイから見ることによって、なぜ小説家が「フィクション性」を導入してまで数多くのエッセイを綴ったのかということの深い文学的意味を浮き彫りにしている。それは、フィクションの力を借りれば、なかば諦観的かつ揶揄的に「自由」な表現ができるからである。すなわち社会を論理的に批判しない「自由」、主な主義・権威を否定する「自由」が手に入るとの解釈が可能となるのである。こうしたことを通して、前田氏は、バローハにとって「フィクション性」がスペイン社会に見る自由の度合いをはかる一種のバロメーターとなっている点、および「フィクション性」を用いて自身の「小説の完全な自由」を守ろうとした意図が見え隠れする点を十分な説得力をもって主張する。以上の点から本論文は、バローハの全体像をこれまでの研究とは違った角度から浮き彫りにしたという点でバローハ研究の進展に大きく貢献したといえよう。むしろ、日本ではこの種の研究は皆無である。よって、論文の何か所かに見られる例証不足は否めないとしても、テーマおよび論述そのものからすれば、価値の高い論文であると評価できる。また審査において、南山大学大学院国際地域文化研究科学学位論文（修士論文・博士論文）審査基準（2015年7月8日研究科委員会承認）に照らしても、「論文の体裁」、「専攻研究に関する言及との関連」、「文献の利用目的」、「全体の論旨の展開」、「学術的価値、独創性」の各項目に関して本論文が十分な高い評価に値することが確認された。

口頭試問における応答においても、自身の研究がどこまでの成果を達成し、何を論じ残しているのかに関しよく自覚していることが窺え、本論文の背後に尚、斯学の発展と蓄積に貢献し得るさらなる可能性が見てとれたことにも、改めて言及しておきたい。前田氏が今後、本論文をもとに今回詳述できなかった事象に枝葉を加え、より幅広い視点から見たバローハ像をまとめ上げていくことを、審査員一同、大いに期待するところである。

平成 31 年 2 月 19 日

審査委員 主査 （教授）上村 直樹
（教授）柳原 孝敦（東京大学）
（教授）牛田 千鶴
（教授）濱田 琢司